

# 加賀騒動の文芸化と劇化

—— 史実から作品への転化 ——

池 茉莉

「加賀騒動」について調べていくと、一般的に知られている騒動の内容と、史実の加賀騒動の内容が異なることを知る。さらにこの御家騒動を題材とした、歌舞伎作品や小説、映像作品が近世から現代に至るまで多く誕生していることも確認することができる。しかし題材といっても、加賀騒動そのものを描いているというよりは、「加賀騒動から着想を得て作られた第三の御家騒動の物語」と言い表したほうが適切である。脚色された作品の多くは加賀騒動の重要な人物である大槻伝蔵や真如院をモデルにオリジナル要素の強い登場人物を設定している。物語の展開においても、御家騒動という一国の主を引きずり降ろしたり、謀反を企んだり、御家騒動らしい流れはそのままに、新しい流れを付け足し、史実の加賀騒動とはまったく別の物語と化している。

歌舞伎と実録体小説においては、藩の役人である大槻伝蔵、吉徳の側室である真如院は藩主である吉徳を手にかけて極悪人とされて

フェリス女学院大学日文学部紀要 第二十五号 (二〇二一年七月)

おり、歌舞伎・実録体小説共に一貫して悪事を働いた者が最終的には成敗される勧善懲悪の展開となっている。史実に関しては第一章で詳細を述べていくが、史実には二人が吉徳を殺めたという確固たる証拠は確認できていないとされている。

本稿では、加賀騒動を題材とした歌舞伎、実録体小説を参考資料としていく。歌舞伎は『鏡山錦栴葉』に着目していく。実録体小説は、『見語大鵬撰』『北雪美談金沢記』『越路加賀見』を当たる。歌舞伎ではほとんどが大槻伝蔵などの重要人物のポジションに別のキャラクターを設定しているため、登場人物と史実の照らし合わせを行う。実録体小説では、大槻伝蔵や真如院など名前の変更はされておらず、あたかもこれらの人物が本当に謀反を企てたかのような書き方がなされているため、実録体小説においては役人である大槻伝蔵が騒動の中で引き起こした事件やその結果藩に及ぼした影響など、話の流れを重要視して調べていく。さらに、実録体小説、歌舞

伎などによる脚色が互いに何らかの影響を与え合つて作られたといふ推測のもと、結論に至る。

本論では加賀騒動を二つのタイプにわけて考える。(一)史実と、(二)フィクション(口伝、巷談を原拠とする脚色類)とする。(一)の加賀騒動は、史実を伝える資料が収集され、金沢市が編纂している『金沢市史』を参考資料とする。情報の統一のため、この資料が、従来最も信頼できる資料として先行研究が行われてきたため使用するのはこの資料のみとする。

(一)の加賀騒動の発端は、藩の政治を担ってきた前田綱紀が隠居して、六代目藩主に前田吉徳が就任したことである。彼の藩主就任と、政治、そして家督争いが騒動を引き起こすこととなつていった。

延享二年に起きたことを確認する。江戸への用事を済ませた吉徳は、前々から患つていた浮腫が悪化し、その後死亡した。この吉徳の死こそが、大槻伝蔵が失脚する最大の引き金となる。

反大槻派であつた吉徳の長男、宗辰や前田直躬は吉徳の死を利用して、大槻伝蔵を失脚させるためのシナリオを作っていく。吉徳の死後、宗辰は大槻伝蔵に贄巨、そして流刑を命じた。藩の重臣と化していた大槻が、主君の死をきっかけに一気に罪人となつた瞬間である。彼は流刑先の越中五箇山で延享三年(一七四六)に自害している現場が発見された。

次に(二)、通説化されたフィクションである「加賀騒動」を確認し、「加賀騒動とは何か」を述べていきたい。

一般的に知られている「加賀騒動」は、大槻伝蔵と藩主・前田吉徳の側室、真如院、中老の浅尾等が企てた毒殺未遂事件であるといえる。藩主の死亡時期は(一)と同じであるためこれを省き、城内であつた、真如院死亡の引き金となつた事件を確認する。

城の女中が御台子で茶の用意をする際に、沸かしていた湯の毒味をした際、胸が苦しくなり、後にその時、湯の中に毒が混ぜられていたと判明した。そして数日が経つと、また次の毒殺未遂事件が発生した。重熙が能を観る際、広式御能で振舞われた料理から異臭が発生し、一度目同様に毒が盛られていることがわかつた。二度も毒が発見されたことにより、城内では調査が開始され、中老の浅尾が浮上した。浅尾を尋問すると、吉徳の妾である真如院に重熙を殺害するよう毒薬を渡されたと白状した。延享二年(一七四五)に大槻伝蔵の後ろ盾の吉徳が死に、土佐守直躬をはじめとする、大槻が行つた加賀藩の財政改革に反対する者たちに引きずり降ろされ、大槻伝蔵は流刑になり、自害した。浅尾は金沢に幽閉され、その後処刑されている。真如院は終身禁固に処され、死亡した。

(二)における「加賀騒動」大槻伝蔵も、史実と彼との間には違いがある。前述した加賀騒動は真如院が主犯格であるようにとれるが、

この加賀騒動には諸説あり、真如院と大槻伝蔵が共謀して重熙の殺害を目論んだとされている。中老の浅尾は実行犯であり、彼女も厳しく処罰されたという。

史実の加賀騒動と騒動の内容を描いた作品に着目する際に注目すべきところは、悪人とされ最終的には成敗されている大槻伝蔵が、藩主から厚い信頼を受け、藩の改革に勤しんだ優秀な役人であったという点である。重熙毒殺未遂事件では重熙に毒を盛ろうとしたのは真如院であるとされているが、大奥の女たちの勢力争いに真如院、浅尾、そして大槻伝蔵が巻き込まれ、事件をでっちあげられたとも言われている。大槻伝蔵は吉徳から寵愛され、絶大な信頼を得ており、吉徳がいなくなってしまうことで大槻伝蔵はかえって後ろ盾がいなくなってしまう。そんな状態になる大槻伝蔵が主君である吉徳を殺める計画を企てる可能性は極めて低い。

(一)に関しては大槻伝蔵と真如院の密通などの、騒動の引き金となった複数の出来事は御家騒動を引き起こす要素にはならないとされている。しかし「加賀騒動」で悪人として扱われている大槻伝蔵、真如院、浅尾の三人は、城内の権力争いに巻き込まれ、作品の中で騒動の中心人物と毒殺未遂事件の実行犯として名を連ねることになってしまったのである。

本論における加賀騒動は二種類あるとしているが、そもそも「加

賀騒動」とは何か。

(二)は騒動のきっかけとなった、大槻が間接的に吉徳に毒を盛ったことや真如院との密通などの歴史的資料、信憑性が乏しい。(一)では吉徳と彼の息子が急死しているが、原因は単なる病死であり、そもそも大槻や真如院自身が引き起こしたことはない。ただ藩主の死亡した原因を城内の門閥役人たちが大槻たちとしたため、大槻は流刑、真如院も城内から追い出された。

大槻はその優秀さと藩主からの信頼の厚さを妬まれ、真如院は家督相続の争いに巻き込まれてそれぞれ刑に処されている。今までの見解は大槻伝蔵と真如院が藩主の座を巡る家督争いに巻き込まれたと考えていたが、史実を改めて見ていくと、「加賀騒動」はたとえていうならば一幕、二幕と分類できることがわかった。且つ、一幕は大槻伝蔵、二幕は真如院、どちらも城内からの追放を目的とした出来事である。一幕で大槻は延享三年（一七四六）に、二幕の真如院は寛延二年（一七四九）に死亡しており、一幕の大槻の追放劇の内容が二幕の前田重熙殺害未遂事件にまで影響を与えるなど伏線となっているというのではなく、一幕の大槻伝蔵、二幕の真如院の追放は完全に独立している事件と考えることができる。故に「加賀騒動」の見どころの一つでもある大槻伝蔵と真如院の密通はやはり成立せず、二人の密通や、一種のロマンスともいえる出来事は、時代

は関係なく、完全にフィクションの枠でのみの出来事である。

一幕の吉徳死亡の原因は病であり、城内で大槻の唯一の後ろ盾であつた吉徳を彼自身が殺めるわけもなく、二幕は真如院が家督争いに巻き込まれた。この二つを合わせて考えてもこれらの出来事を御家騒動・加賀騒動と定義することは難しい。一幕はそもそも御家騒動の要因である家督争い、藩主への反逆のクーデターの要素は皆無である。二幕は家督争いが原因で真如院は追放されたが、家督争いを起したのは真如院ではなく、真如院と同じく吉徳の側室の善良院一派であるとされる。本来、真如院が死亡する原因を作つた善良院一派に焦点が当たるとは、歴史の中では真如院が史実、フィクション共に有名である。史実を確認するとあまりにも御家騒動の要素が少なく、そもそも「加賀騒動」は御家騒動ではないと考えることができる。藩主が相次いで死亡し、有能な役人が追放されたという城内の出来事は確かに騒動ではあるが、御家騒動とするにはその要素は少ない。近世の政治史を専門とする福田千鶴氏が『新選 御家騒動 下』で加賀騒動を御家騒動とは別の事件と断言している。

周知の加賀騒動とは、門閥重臣による先代寵臣の徹底排除事件であつた。<sup>1)</sup>

「加賀騒動」のメインとなる出来事はもちろん一幕の大槻伝蔵の追放であり、この内容が脚色され、クーデターの要素が盛り込まれ、御家騒動とされてきた。しかし、史実の「加賀騒動」は、藩主の病死、城内の家督争いに巻き込まれた側室という内容は、御家騒動という言葉から想像できるほど、盛り上がりのある出来事ではない。

そもそも「加賀騒動」は御家騒動足り得ない出来事であるという結論が出た。史実よりフィクション性のある出来事が世の中に流布していった要因は、加賀騒動が終着した直後に流行した実録体小説である。次に第二章では加賀騒動を題材とした実録体小説の内容を確認していきたい。「加賀騒動」は加賀藩の役人・大槻伝蔵が真如院、女中の浅尾と結託し藩主・重熙を殺害しようとした御家騒動として知られている。だが実際は、優秀で藩主からの信頼が厚い大槻を現職から引きずり降ろそうと、前田直躬をはじめとする重臣たちが企てた大槻排除を目的とした事件である。いつてみれば、そこにはフィクションの通説化が起きており、つまり史実ではなく、この事件を耳にした者が潤色したもの、それが「加賀騒動」である。そもそも大槻伝蔵という人物は、真如院とも手を組んでいなければ、藩主を殺めてもいけないのである。真如院も浅尾に指示を出していないければ、浅尾も毒を盛る実行犯にはなっていない。

史実のスケールは限りなく小さくとも、近世から現代に至るまで、

「加賀騒動」を素材とした文芸、演劇作品が数多く輩出されている。「加賀見山旧錦絵」（一七八二年初演）やその後日談「加賀見山再岩藤」（一八六〇年初演）が有名だが、「加賀騒動」の出発点は、実録体小説である。実録体小説はその場で見ていたかのように、しかしフィクションも織り交ぜて描かれており、加賀騒動を下敷きにした実録体小説も、その枠からはみ出てはいない。大槻伝蔵は悪人であり、真如院は悪女として描かれており、藩主を殺害した者として扱われているのである。加賀騒動を描いた文芸作品は宝暦時代に流行した実録体小説がある。加賀騒動を描いた実録体小説は『見語大鵬撰』『北雪美談金沢記』『越路加賀見』『野狐物語』など多数存在している。実録体小説は写本として世に出回ったが、書名が同じであったりも成立時期と内容が異なるものが多く存在しており、そのため作品の系統分けが成されている。青山克彌氏の『加賀の文学創造 戦国軍記・実録考』によると『野狐物語』一七四八年～一七五一年頃（寛延元年～宝暦初年頃）が加賀騒動を題材とする実録体小説の始祖とされている。

『見語大鵬撰』は第一系統本、第二系統本と分類されている。本論で参考にする『見語大鵬撰』は石川県図書館協会編の『稗史集上』に収録されているものを使用する。『稗史集上』における『見語大鵬撰』は第一系統本とされ、また『越路加賀見』の転記とされ

ている。第一系統本の『見語大鵬撰』は当時最も伝播した加賀騒動物の実録体小説であり、加賀騒動の世界を描いた『加賀見山廓写本』『加賀見山旧錦絵』も第一系統本『見語大鵬撰』を参考にしたとされている。加賀騒動を題材とした実録体小説は主にこの四つとされている。『野狐物語』がはじめに執筆され、『越路加賀見』『見語大鵬撰』『北雪美談金沢実記』という順番という意見がある。『越路加賀見』一七五六年（宝暦六年）『見語大鵬撰』一七六四年～一七七二年（宝暦九年～明和元年）『北雪美談金沢実記』の成立時は不明である。

実録体小説においては江戸文化・風俗研究家の三田村鳶魚氏の研究を参考にしていく。宝暦期、一七五〇年代は珍話・珍説が愛された時代であると言う。宝暦期には史実と創作を織り交ぜた実録体小説ができあがり、嘘の歴史が作られていった。加賀騒動に決着がついたのも、その宝暦期である。加賀騒動には明らかにされていない事実も多くあり、その曖昧な御家騒動の出来事は人々の関心をそそり、当時流行していた実録体小説の題材となっていた。『見語大鵬撰』、『越路加賀見』、『野狐物語』、『北雪美談金沢実記』など加賀騒動を描いた実録体小説がある中で、『見語大鵬撰』は明和八年（一七七二）の『禁書目録』に記載されている。御家騒動は、当時においてセンシティブなものであったためその内容を記録に残すこ

とは難しいものであったが、広範囲に渡って読まれており、歌舞伎、浄瑠璃の脚本としても多く利用されていたとされている。

実録体小説『見語大鵬撰』<sup>2</sup>は一から九の巻で構成されており、巻之五「大槻長玄毒薬を以て立身の事并御膳掛の者とも横死の事」では、加賀騒動が起こる前に大槻伝蔵が重熙の先代、吉徳に毒を盛る描写がある。

(略)長玄御腕の蓋を取り改め見るふりにてひそかに手に持ちたる斑猫を汁の中へ入れ大いに驚きたる体にて(略)<sup>3</sup>

大槻伝蔵が吉徳に毒を盛る姿は『見語大鵬撰』以外の実録体小説、『北雪美談金沢記』にもあり、この作品では大槻伝蔵が吉徳の茶碗に砒霜を仕込んである。どちらの作品でも大槻伝蔵は毒を自ら茶碗に仕込み、自分で発見するというマッチポンプをしている。大槻伝蔵が毒を発見した際、毒味が行われ吟味役、御膳番、配膳方、料理人の四人が死んでいる。大槻伝蔵はこの自演を機に、吉徳の信頼を掴み取り、吉徳が「大槻傳蔵頼みとするは彼一人なり」とする立場になっている。彼の出世の裏では吉徳毒殺未遂の犯人とされた役人が拷問にかけられ何人も死んでいる。作品によっては、大槻伝蔵は吉徳、吉辰、二人の藩主を毒殺したとされている。実録体小説

では、城内における大槻伝蔵の狡猾な目論み、華やかな出世の道、その結果発生した多くの死人という、彼の悪事が大量に記されており、実録体小説における大槻伝蔵の「極悪人」という設定が色濃く表現されている。

『見語大鵬撰』『北雪美談金沢記』では大槻伝蔵の城内における立ち位置が記されているが、『越路加賀見』では、大槻伝蔵が指揮をとる政治に対する評価もなされていた。

利常卿の嫡子従四位少將光高卿、其子従三位參議綱紀卿相續いで、聖儒の道専ら尊み給ひしより、國民豊かに靜謐也。上の好む所下是に慣ふごやか。家中の諸士も専ら文武の道を學び、明德の儒教国郡に學びしかば、眞忠の節臣も多く、秀才の役人絶えずして、農工商共に民屋うるおひ、竈の煙賑しく、誠に無双の豊國成しに、其の御子若狭守従三位宰相吉徳卿の御代に至り、大槻内藏充と言ふ佞臣に御心を奪はれ給ひ、儒門を疎にし給ひしかば、御父綱紀卿の御代とは政道も遙に劣り、民の課役しげくして國民困窮に及びける。此の時彼の愛臣内藏充逆心を企て、既に前田の御家を奪はんと欲す。此の時に當つて、國の困窮斜ならず。しかも吉徳卿逝去の後、御子正四位中將宗辰卿不慮に毒殺の害に逢ひ給ひ、御舍弟正四位中將重熙をも毒殺せんと計

りしかども、天命のなす所か陰謀頭れけるが<sup>①</sup>

『越路加賀見』では、加賀騒動における大槻伝蔵の悪人的要素をただ書き連ねているのではなく、大槻伝蔵が役人として活躍する前、吉徳の先代の綱紀との政治の比較がされており、この描写が作品の中に挿入されることよつて、大槻伝蔵の悪の要素を際立たせて、そして同時に彼の手中に収められた加賀藩の、困窮していた財政が浮き彫りになっている。もう一つ注目すべき点は、作品の内容が城内だけでなく、藩に住む庶民にも及んでいることである。前述の通り、綱紀が藩主であった時期は吉徳の頃と比べ、家臣は優秀・忠実であり、藩の財政は豊かであったとされている。しかし綱紀に代わり、吉徳が藩主となった際には、家臣の大槻伝蔵が頭角を現し、藩の状況は急変してしまふ。

綱紀の頃と比べ、政治は劣り、「国民の生活は困窮する」。実録体小説の享受者は、庶民であり、政権を握る役人によつて、將軍家だけでなく、自分たち庶民の生活にも悪影響が出てしまふと読み取る。御家騒動が政権のみならず庶民の生活にまで影響を及ぼす描写をすることによつて、その元凶である大槻伝蔵を憎む、彼を悪と見なす描写に共感させ、後に悪人・大槻伝蔵への処を正当化し、勧善懲悪を演出している。大槻伝蔵が吉徳から信頼を得ていた役人であつ

たことは史実と変わりはないが、大槻伝蔵は吉徳を手中に収め、藩主である彼を傀儡のように扱っているような描写もなされている。

また、大槻伝蔵は藩に貢献した役人ではなく、贅沢を極め、他者を蹴落としてきた悪人という描かれ方もされている。さらには加賀騒動の本身は重熙毒殺未遂事件の他に、大槻伝蔵と真如院の密通事件も含まれているというように記されている。

加賀騒動の世界を描いた歌舞伎作品は『加賀見山廓写本』や『加賀見山旧錦絵』、その後日談である『加賀見山再岩藤』など複数あるが、これらの作品は騒動の内容を描いているというよりは、大槻伝蔵や真如院をモデルとした、またはオリジナルのキャラクターを登場させ、加賀騒動の流れを汲んだ内容になっている。上演当時は御家騒動が非常にセンシティブなものとして扱われており、加賀騒動とはつきりわかる演出はなされなかつたため、このような描き方になっている。

初演時の配役は以下の通りである。團左菊をはじめとする当時の名優が揃つてキャストینگされている。<sup>②</sup>

大月源蔵（後に大月蔵人となる。大槻伝蔵に相当）…五代目尾上菊五郎

お貞（真如院）…八代目岩井半四郎

中老政尾（浅尾に相当）…初代市川左團次

左枝佐渡守（前田直躬・前田土佐守に相当）…中村宗十郎  
小田大炊（老臣）…九代目市川團十郎

この作品は加賀騒動の重要人物大月蔵人の出世から、彼の目論み  
が露見し、捕らわれる場面を描いている。『鏡山錦栞葉』の脚色は  
『見語大鵬撰』を参考にしているとされている。御家横領を企む「加  
賀見山廓写本」の望月源蔵や「加賀見山旧錦絵」の岩藤という、加  
賀騒動の重要人物がモデルとなったキャラクターが登場するこれら  
の作品と比べ、黙阿弥の『鏡山錦栞葉』は大月蔵人と名を変え、悪  
人・大槻伝蔵、彼そのものが登場している。『鏡山錦栞葉』について、  
若林喜三郎氏は「加賀騒動」の中で、

加賀騒動の劇化は、安永七年（一七七八年）の「加賀見山廓写  
本」というのが最初であったというが、よく知られているのは、  
（略）河竹黙阿弥の『鏡山錦栞葉』である。華々しく、はやや  
かになっているが、その内容は「見語大鵬撰」から一步も出て  
いない。<sup>(6)</sup>

と述べている。加賀騒動の世界を描いた『鏡山錦栞葉』の典拠となっ  
ている実録体小説は史実とは異なる内容であり、実録に則って書い

た歌舞伎や浄瑠璃作品も史実とは別の物語が展開されている。『鏡  
山錦栞葉』以前に加賀騒動の世界を描いた歌舞伎は複数あるが、ど  
れも加賀騒動の流れを残してはいるものの、まったく別の人物たち  
によって物語が展開している。

加賀騒動最初の劇化である「加賀見山廓写本」をはじめ、加賀騒  
動を描いた作品は複数あるが、どの作品も、藩の権力争いに大槻伝  
蔵等が巻き込まれた、という悲劇的な内容にはなっていない。謀反  
を企て暗躍した極悪人が最終的には成敗されるという勧善懲悪な流  
れとなっており、実録体小説と同様の内容になっている。

加賀騒動を題材とした作品は実録体小説↓歌舞伎という手順を踏  
んでいるが、実録体小説と歌舞伎の間には合巻が存在した可能性に  
ついて一考したい。

一八二三年刊行の曲亭馬琴の合巻に『月都大内鏡』がある。<sup>(7)</sup>この  
作品は戦国時代の武将、大内義隆に仕える陶晴賢の謀反、その反逆  
を裁く大江音成（毛利元就）という史実の流れを太閤記の世界に当  
てはめた内容となっている。また内容は、一、陶晴賢の出世、二、  
大江音成の活躍、三、陶晴賢の反逆と陶晴賢勢と大江音成勢の対立  
の三つに区分でき、一の陶晴賢出世の物語が加賀騒動の流れを汲ん  
でいるものとされている。今回は加賀騒動の要素が組み込まれてい  
るとされる一の陶晴賢の出世に加え、二の大江音成の活躍について



も確認をした。

加賀騒動物における悪役の出世には城内の事件が必須であるが、『月都大内鏡』では陶晴賢の身の回りでは二度の事件が勃発し、その中で晴宗という人物は悪役として形成されていく。第一の事件は冒頭、陶晴宗、その嫡男陶太郎、乳母の高折とその夫達平、そしてその子ども長太郎が登場する。長太郎が後の陶晴賢であり、高折・達平の息子、陶太郎の伽坊主・長加という立場にある。加賀騒動の流れというと、物語が展開するにつれ悪役と化す人物がいること、その人物は冒頭では身分は低く、後に出世を果たす流れが特徴にあるが、『月都大内鏡』も冒頭に長太郎は主の晴宗の信頼を得る場面がある。晴宗が主君である大内義隆から賜った鳥を陶太郎が籠から逃がし、晴宗は激怒し実の息子である陶太郎を手討ちにしようとした。長加は陶太郎を庇い、自分が鳥を逃がした張本人であると言い、柱に手を繋がる。晴宗は陶太郎の仕業だと口を割らせようとするが、長加は真実を話すどころか、近くにあった手水鉢の栓を抜き、自ら水を被り命を懸けて陶太郎を守ろうとする。その姿に感銘を受けた晴宗は、陶太郎を咎めることはせず、長加に長太郎と名乗らせさせた。この場面は前述した実録体小説のような狂言ではなく、晴宗の嫡男、陶太郎の行いが晴宗の逆鱗に触れたところを長太郎が庇っている。後に悪役となる長太郎が主君である晴宗の信頼を得ることと

なった出来事は前述した実録体小説や『鏡山錦栞葉』とは異なり狂言ではなく、長太郎が意図したのではない。陶太郎という第二の人物によって引き起こされた事件を、身を呈して解決したことで、後の悪役となる長太郎は出世への一步を踏み出した。

次の展開は実録体小説等の作品には存在しない場面である。長太郎の父・達平は勝手役であり、陶家の軍用金を横領しようとする妻である高折と手を組む。この悪事は後に晴宗に鞠つけられることとなり、二人は手討ちにあう。長太郎は実子として自分も罰を受けると身を差し出すが、達平と高折のみが処刑され、長太郎は晴宗から真摯な姿勢を評価され、嫡男陶太郎の武芸の相手を任せられることとなる。この時長太郎は両親の企てを影で耳にしており、あらかじめ達平の財布に石を詰め、二人が横領をしていないと庇いだてる。この長太郎の機転が効いた行いに晴宗は二度目の感銘を受ける。

前述した『月都大内鏡』冒頭の事件は晴宗の嫡男・陶太郎が引き起こしたものであり、既に確認した『見語大鵬撰』や『越路加賀見』は自ら仕込んだ毒を発見し毒殺未遂事件をでっちあげており、出世への糧となった出来事に計画性が含まれているが、『月都大内鏡』における最初の事件は突発性があり、長太郎が原因で起こったものではない。愛鳥失踪事件（『月都大内鏡』における最初の事件）での長太郎は純粹に主君の嫡男である陶太郎の命を守ろうと身を呈し

ており、本文や挿絵にも裏で姦計を企てる姿は確認することはできない。また、『見語大鵬撰』や他の実録体小説、『鏡山錦楓葉』に存在する毒薬を使用する場面は『月都大内鏡』ではこの時点では見受けられず、続けて起きる達平高折軍用金横領事件（『月都大内鏡』における第二の事件）においても長太郎は晴宗への忠義に厚い少年として描かれている。長太郎が悪と化すタイミングは第二の事件・達平高折軍用金横領事件の直後にある。

達平と高折が処刑された二、三年後に晴宗は城内の奥座敷にて、長太郎が何者かと言い争う声を聴く。藤沢毅氏の『月都大内鏡』と御家騒動』では『月都大内鏡』の取材源を指摘している。長太郎の名前やキャラクター性、話の内容を加味すると、『月都大内鏡』が下敷きにしたとされる作品は読本の『絵本雪鏡談』であると述べられている。

『絵本雪鏡談』と『月都大内鏡』にはもう一つ大きな共通点が存在する。それまでの加賀騒動物と違い、『絵本雪鏡談』では長太郎あるいは長源が、最初は完全に忠義一筋、また武芸学問ともに優秀な人物として描かれている。(略)<sup>3)</sup>

実録体小説や『鏡山錦楓葉』では記されていないなかった謀反への動

機が記されており、この後の展開は加賀騒動の流れではなく、大間記等の流れを汲んでいる。

『見語大鵬撰』と『鏡山錦楓葉』の間に合巻である『月都大内鏡』の存在があったのではないかとし、史実→実録体小説→合巻→歌舞伎という流動があるという仮説を立てた。しかし『月都大内鏡』には『鏡山錦楓葉』のように枠組みとされる『見語大鵬撰』と類似する場面があるというよりは、加賀騒動の流れとされる要素が複数存在していた。『月都大内鏡』が取材源としたのは『見語大鵬撰』というよりは『絵本雪鏡談』であるということは藤沢氏の先行研究が明らかにしている。『月都大内鏡』と『絵本雪鏡談』の共通点は先ほど藤沢氏の研究を参考に明らかにしたが、『絵本雪鏡談』に関しては話の展開では『月都大内鏡』における陶晴賢は登場せず、『見語大鵬撰』等の実録体小説同様に史実の大権伝蔵に相当する長玄が存在する。

『見語大鵬撰』から『鏡山錦楓葉』に限らず、史実や文芸作品から舞台へと転換されるというのは、物語を立体化して表すと言え換えることができる。その際、必然的に「読む」から「観る」へと消費者の行為も変化していくのである。作品が平面から立体となった結果は、やはり典拠となった『見語大鵬撰』の内容を表す際、毒味役の吐血など舞台だからできることを突き詰めていき、やはり「脚

色」され、より派手で盛り上がる内容へと姿を変えていく。

実録体小説の享受者である庶民が御家騒動の内情を知ることが難しく、それ故に城の中で起きたとされる將軍家のスキャンダルに強い興味を抱く。実録体小説の作者は未だ不明のままで、その作者は庶民の、一種の下世話な興味を満たすため、ありもしない事件を作り庶民に提供していった。庶民は通常では知り得ることができない城の向こう側の出来事を、文芸作品を通じて確認する。彼らには作品の内容の真偽を知る術はなく、写本に書かれた物語がすべてと考えるのではない。実録体小説は、庶民の強い好奇心の産物である。そしてそんな文芸作品が「加賀騒動」の史実よりフィクションのほうを有名にし、現代にまでその見解が浸透している。

『鏡山錦栞』の素材となった実録体小説は『見語大鵬撰』であると念頭にこれまで研究が続けてきたが、それだけではなくこれまでに確認した『野狐物語』『越路加賀見』『北雪美談金沢実記』の実録体小説、『繪本雪鏡談』の読本、すべてに共通する毒味役が死亡する事件が記されており、『見語大鵬撰』のみならず、これらの作品も『鏡山錦栞』の下敷きとなったとされている。青山氏の著書の中に「国立国会図書館本」(十七卷五冊。「知是候」序。五冊目の後見返しに「金沢文庫終」と書き入れがある)という第二系統本『見語大鵬撰』に関する記述がある。同氏の著書『加賀騒動実録』『金沢

文庫』をめぐって」では、前述した第二系統本『見語大鵬撰』は、『野狐物語』『越路加賀見』という二つの実録体小説を経てできあがったものではなく、『見語大鵬撰』という名がつけられているまったく別の内容の実録体小説であることが記述されている。五冊目の末尾に記されているように、『見語大鵬撰』とされているこの作品は『金沢文庫』という実録体小説とされている。『金沢文庫』の作者は不明であり、一七六五年には成立していたとされる。本論で内容を詳しく確認はしない。『見語大鵬撰』と内容は異なるとされているが、『見語大鵬撰』が粉本になったと明らかにされており、登場人物は吉徳や大槻長玄、後の伝蔵、お貞(真如院)など名前は他の実録体小説のようにそのままに、江戸城内での吉徳毒殺未遂事件が起こっている。

第一系統本と第二系統本の違いに関しては青山氏によると第一系統本に新たな挿話をしたものが第二系統本とし、虚構性を帯びているとしている。現時点では国立国会図書館本『見語大鵬撰』の内容を確認できていない。

【註】

- (1) 『加賀の文学創造 戦国軍記・実録考』二〇〇六年 勉誠出版 青山克彌 一五六頁
- (2) 『稗史集 上』を使用
- (3) 『加賀騒動』一九七九年 中央公論社 若林喜三郎 一五六頁
- (4) 3に同じ。五十二頁
- (5) 『黙阿弥全集第十一卷』一九二六年 春陽堂 監修：河竹糸女 校訂・編纂：河竹繁俊 『歌舞伎事典』一九八三年 平凡社 下中直人
- (6) 3に同じ。三七頁
- (7) 森屋治兵衛版 上田市立図書館(花月文庫)『新局玉石童子訓』二〇〇一年 国書刊行会 曲亭馬琴作 内田保廣 藤沢毅校訂
- (8) 『月都大内鏡と加賀騒動』藤沢毅 二四三頁